

Maaskamp, Evert (ed.)

Representations of dresses, morals and customs, in the Kingdom of Holland, at the beginning of the nineteenth century.

Amsterdam, printed for E. Maaskamp, 1808. (文献番号3-239)

Hiler p.557

マースカンプ編

19世紀初期オランダ王国の衣装・道徳・習慣の描写

アムステルダム、ロッテルダム、ハーグ、フリースラント、ゼーラントなどオランダ各地の人々を描いた本書は、オランダ王国の注文書として編集企画され、1808年にアムステルダムで刊行された。マースカンプ商会の代表者であるE. マースカンプ (Evert Maaskamp) は、21枚の手彩色点刻銅版画1枚ごとに当時の生活様式、かぶりもの、衣服の着用法、色彩、素材に及ぶ詳細な説明文を付けて出版した。図版はデザイン学校の経営者であり、画家としても活躍していたヤコブ・クィペル (Jacob Kuyper 1761-1808) のスケッチをもとに、ルドウィヒ・ポルトマン (Ludwig Portman 1772-1813) のスティプル法による銅版画に彩色が施されている。各図版の下には、オランダ語とフランス語のキャプションがある。男女、母娘、姉妹、友達の2人一組の人物の衣装と動き、会話を通して市民生活の自然な姿が描出されている本書は、19世紀初期のオランダ各地の民衆服の記録としても趣きが深い。

巻頭の寓話的な口絵の説明によれば、中央に腰掛けた素描の女神は、自分の作品を職業の神であるマーキュリーにさし出し、ヨーロッパ人としての国民の偉大な証しと快い尽力を申し出ている。かたわらの机の上には衣装のパターンが数枚置かれ、女神の足元の紙挟みの表紙には国民を意味するオランダの紋章が描かれている。図版の枠の四角には①貿易、②航海、③漁業、④農業の四つの図柄が描かれ、当時のオランダを象徴している。オランダは海上貿易、毛織物・麻織物工業の発展、東インド会社によるアジアへの商業進出によって17世紀には黄金時代を築き、小国オランダ国民の経済力はヨーロッパ中の注目を浴びた。その後フランス革命の波の中でオランダ共和国は崩壊し、1815年にオランダ王国が成立するまでナポレオン帝政下にベルギーと共に併合される。こうした時代背景の中で、国の注文書として刊行された本書の意図は、右図 (本書の口絵) に象徴的に示されている。 (内野)

